

## 發話・理解労力の軽減に優先する體系の單純化 —市來・串木野方言の繼續相を資料に— 黒木邦彦

本研究では、市來・串木野方言（以下「市串方言」）における繼續相の發話・理解労力と使用頻度・選擇嗜好とを解明し、體系變化の動機として體系の單純化が發話・理解労力の軽減に勝り得ることを示した。本研究に言ふ市串方言とは、鹿兒島縣の舊市來町ないし舊串木野市（現いちき串木野市）で言語形成期を過ぎた老年層の方言である。同方言は相に特徴を持ち、5種類もの繼續相を揃へてゐる。それ／＼の意味・用法は同一ではないが、重なるところも小さくない。とりわけ、動作動詞の進行はそのうちの4形式（以下「繼續相4種」）で表し得るのである。しかし、動作進行表現における繼續相4種の使用頻度や選擇嗜好は、今のところ定かではない。このことが解明されれば、類義形式の使い分けや體系變化の動機を研究するに良い資料と成らう。そこで、本研究ではまづ、繼續相4種の發話・理解に掛かる労力に注目し、動作進行表現において兩労力を抑へるには {-wor-} が最適であることを示す。(i) 拍數、音節數、音調語數に乏しい形式は發話労力を、(ii) 多義性に缺ける形式は理解労力を抑へると假定すれば、發話・理解労力を最小化するものは、{-wor-} である。次いで、この豫想が實態に合つてゐるか否かを母語話者同士の談話で確認する。談話内の動作進行表現を見るに、同表現に最もよく用ゐられる繼續相は {-wor-} ではなく、{-tjor-} であつた。(i) 客體變化動詞語幹が {-kata} を、(ii) {omow-} が {-tjor-} を専ら選ぶといふ偏りは有るが、この結果は先の豫想に反する。{-tjor-} は繼續相4種のうち最も多義的であり、變化進行表現以外の靜態表現はこれひとつで賄ひ得る。靜態表現の大半を {-tjor-} で済ますといふ相體系の單純化が市串方言には認められるのである。以上のやうに、市串方言においては體系の單純化が發話・理解労力の軽減に優先してゐる。たゞし、發話・理解労力の軽減に起因する體系變化も他方では認められる。このやうに、體系變化の動機は一様ではなく、あひ反するもの同士すら認められる。したがって、確率論の面から體系變化を説くにあたっては、動機の變動に對應しうる確率模型が要る。